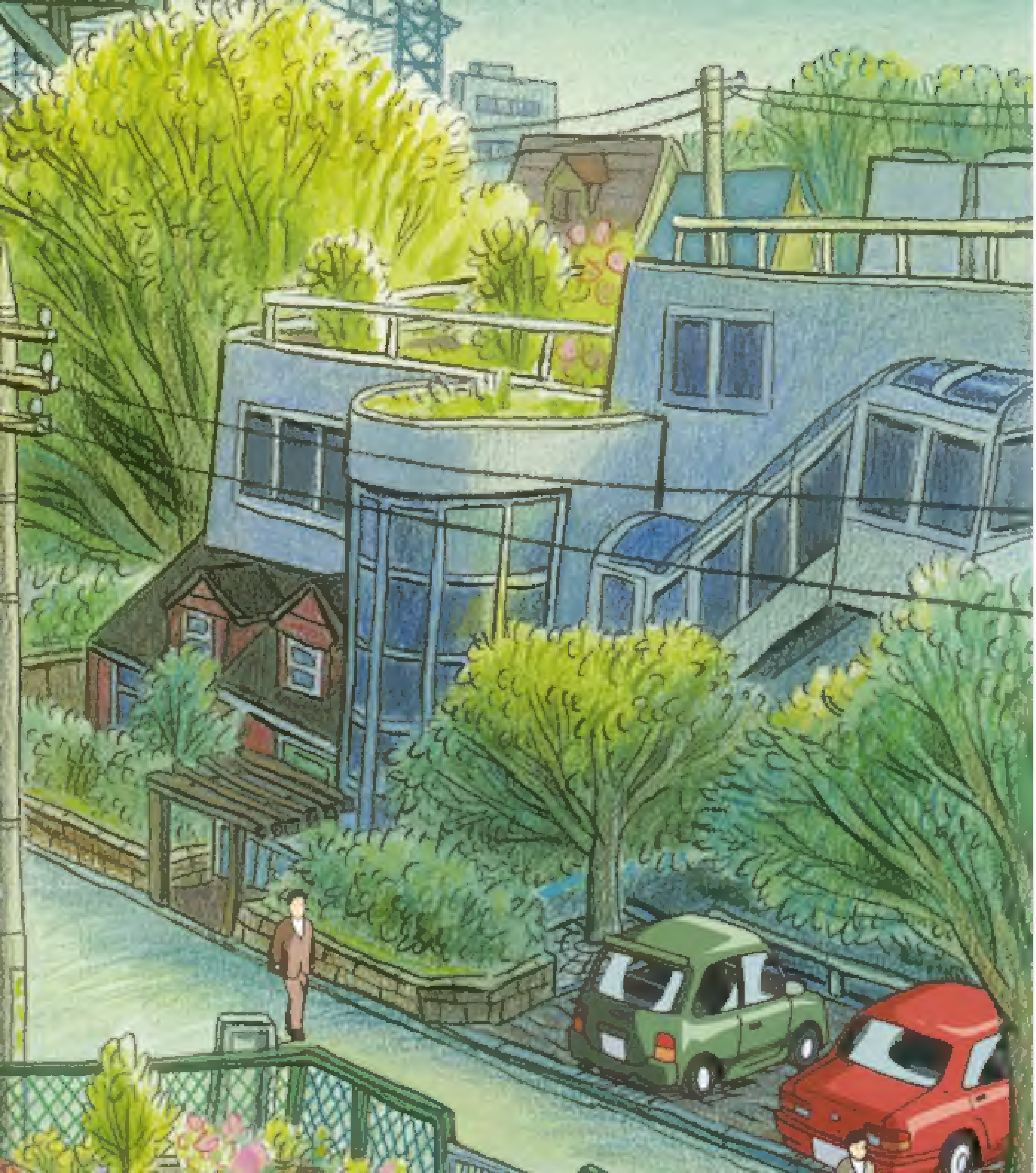

スタジオジブリ作品
STUDIO GHIBLI
コロの大さんぽ





原作・脚本・監督……宮崎 駿
音楽……野見祐二
演出アニメーター……芳尾英明
制作……スタジオジブリ

スタジオジブリ/
ムゼオ・ダルテ・ジブリ提携作品

コロの大さんぽ


コロあぶないよ
おさんぽじゃないの。
がっこういくんだから
いってきまーす



「だめよコロ!
お母さーん　コロでちゃったよ」



「かえったらおさんぽいくからね」



「もうコロったら
おうちにもどりなさい」







「犬だよ
カワイイね」



「コロ！コロ！
どこへいっちゃったのかしら」





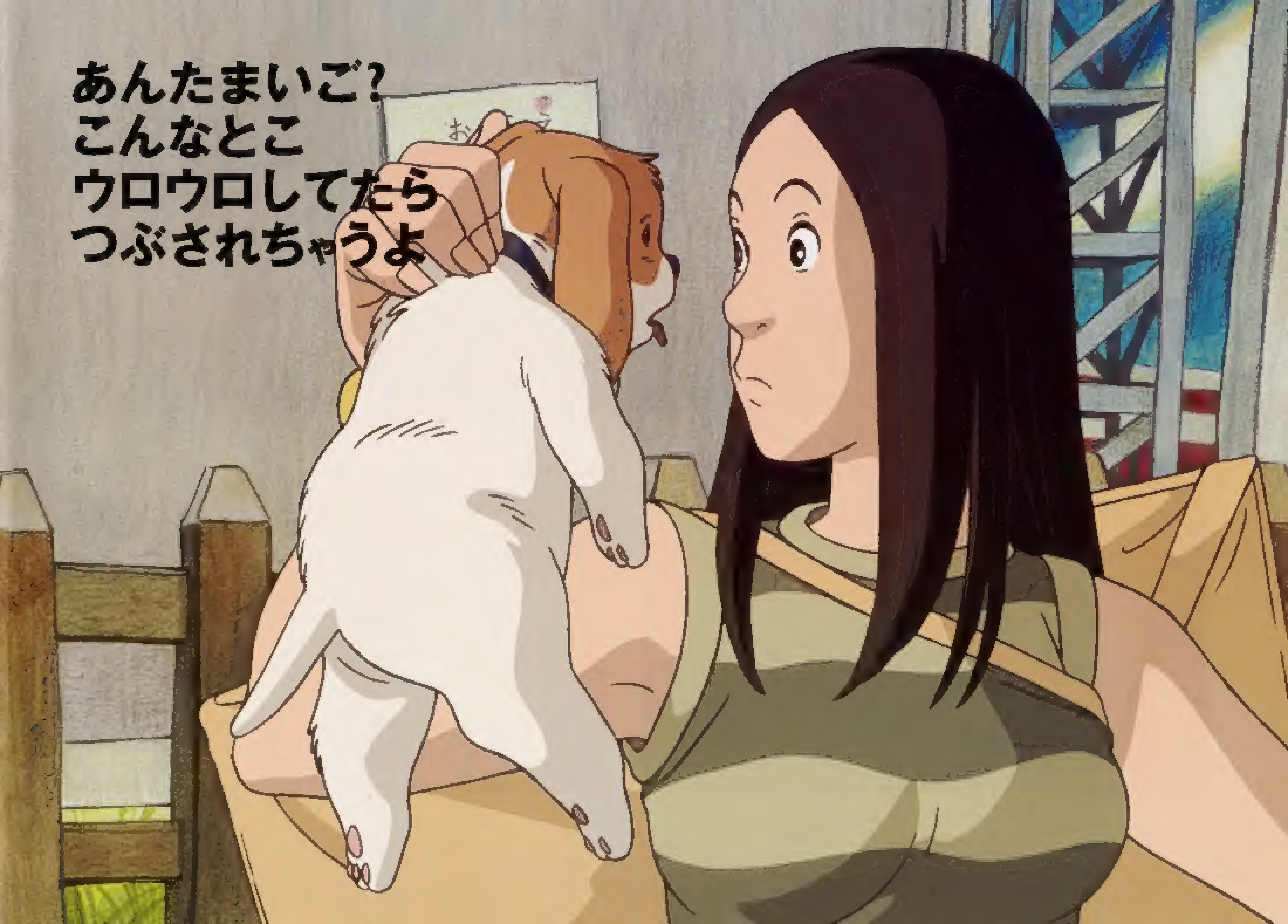


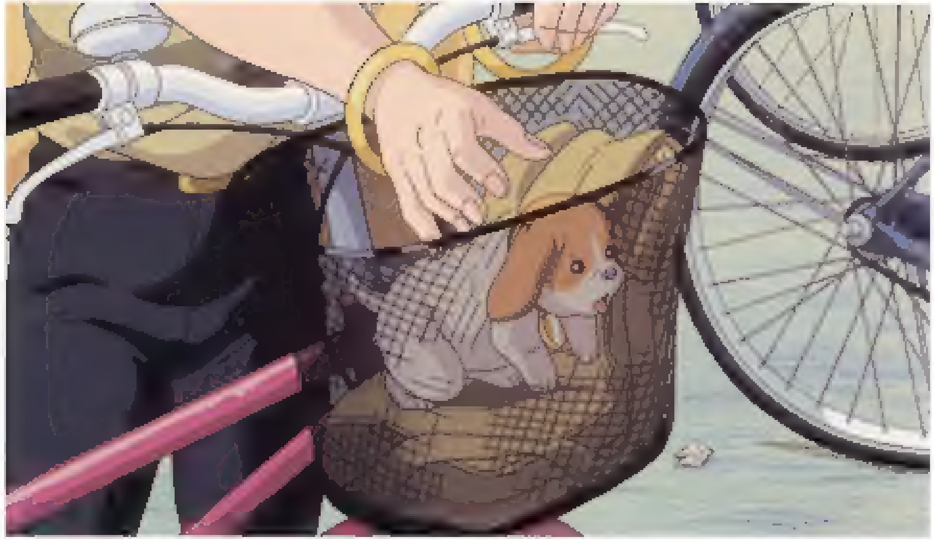


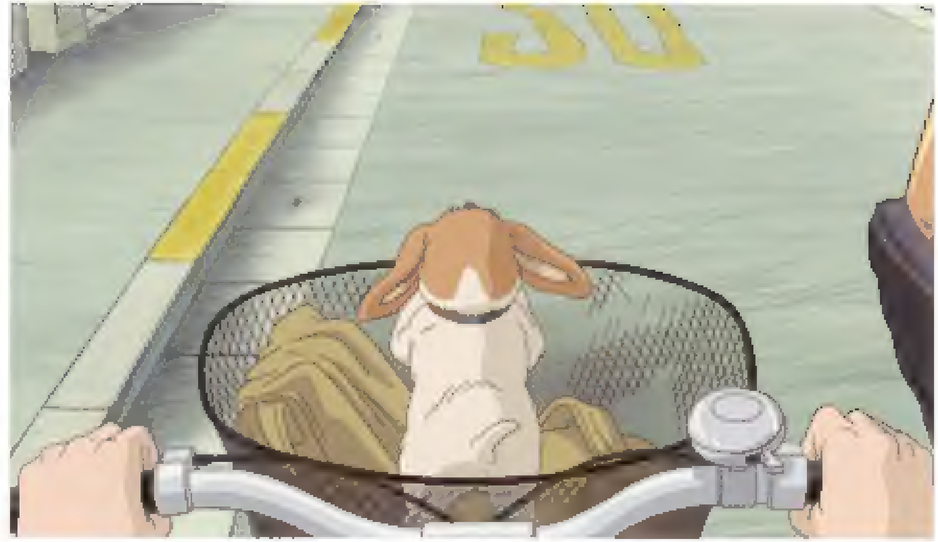




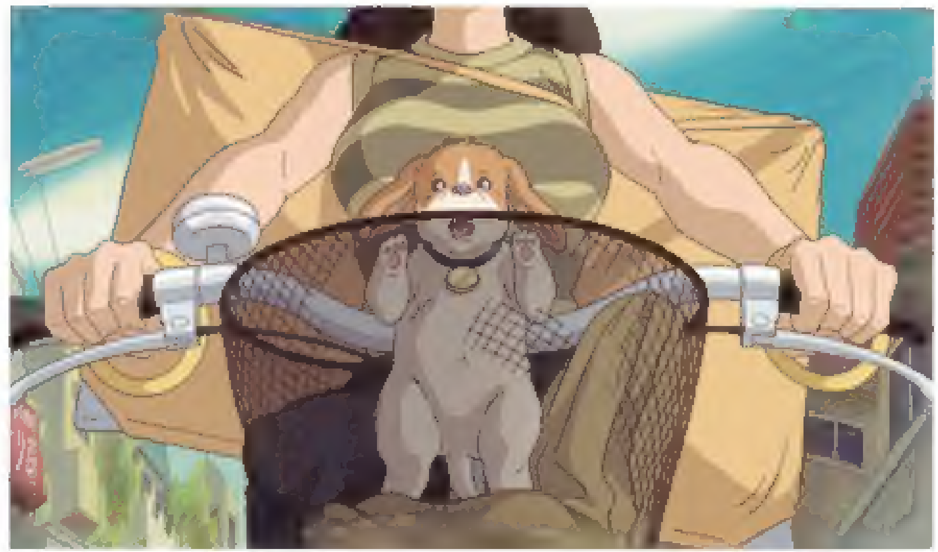
「あっ　わりィ」

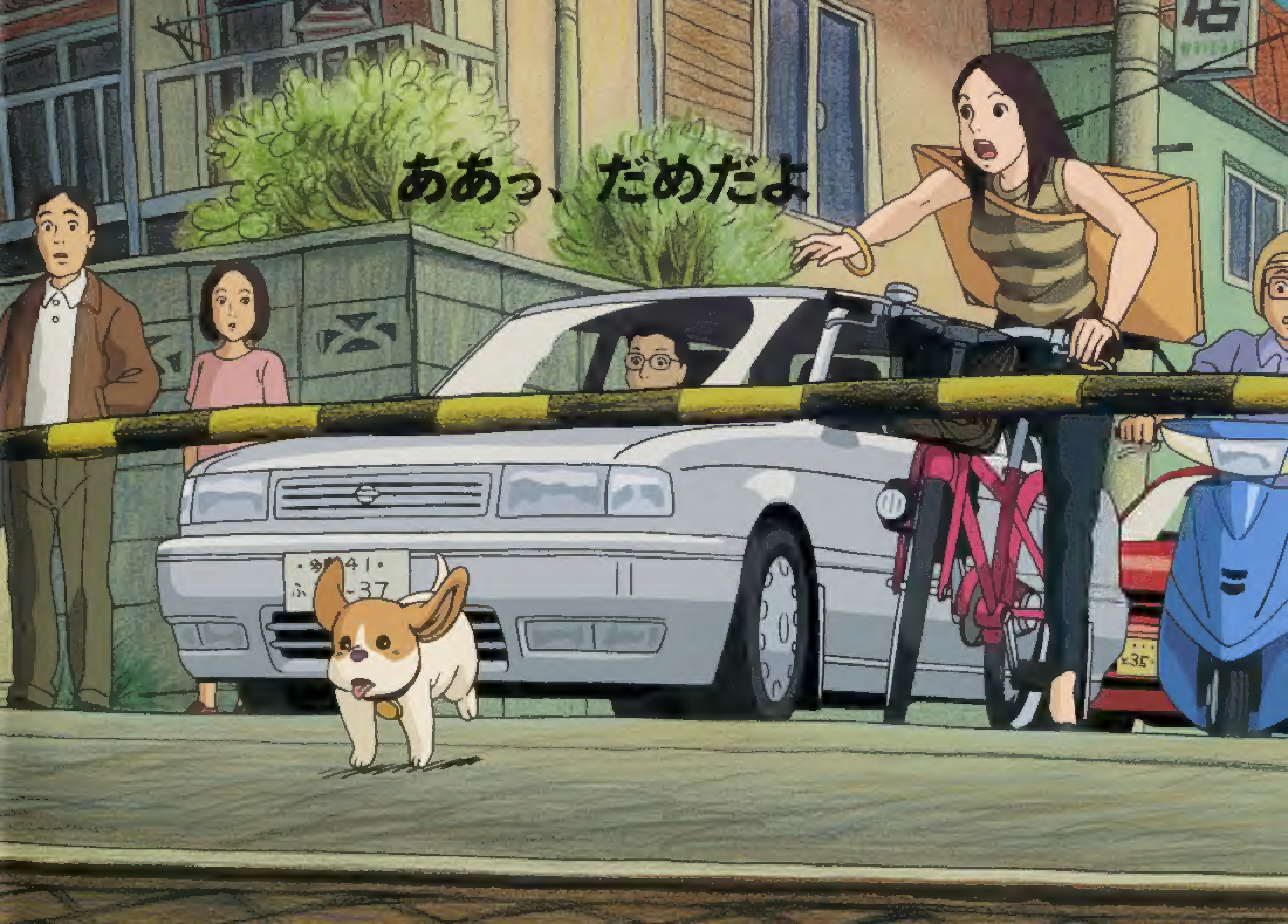

あんたまいご?
こんなとこ
ウロウロしてたら
つぶされちゃうよ


「おとなしくしてな」









ああっ、だめだよ





「サワ子いいかげんにしてちょうだい。
お家に入りなさい」



「サワ子は
コロの絵が上手だねェ」



「コロー、コロー」



「お父さん
コロがいなくなっちゃった!!」



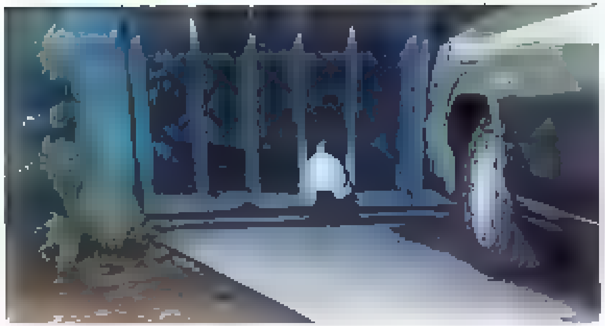




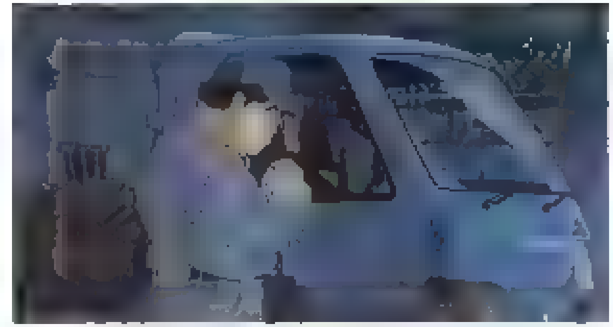


「ご近所の仔犬かしらね」
「かわいいね」


もしもし
きみはどこの子ですか?
DOG







「ありゃ、犬コロじゃねえか。
オイ、そんなとこで寝てるとひいちまうぞ」





「どうか、コロが帰ってきますように」

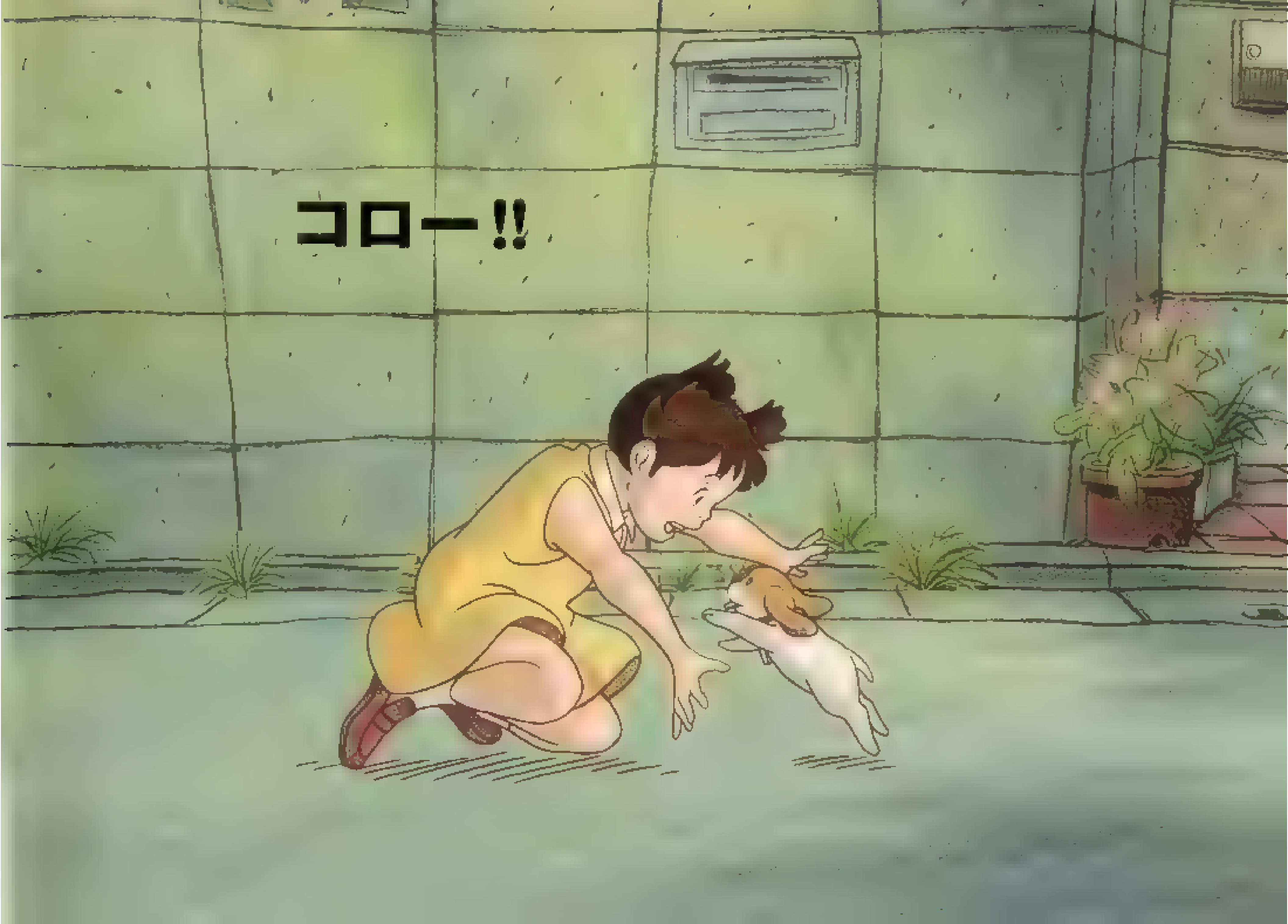






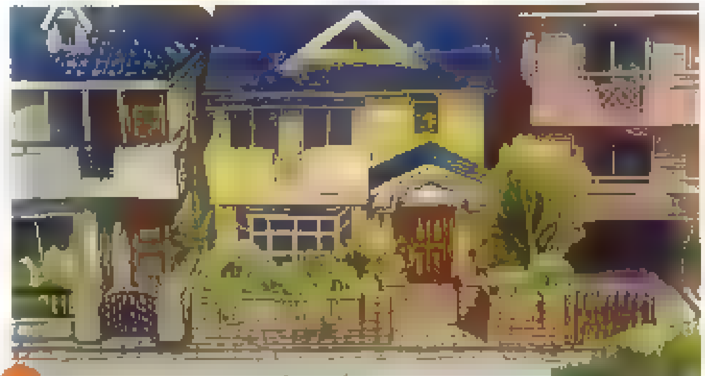


アッ。


コロー!!

コロが大さんぽした場所

コロが迷子になった道のりを地図の上で見てみよう
小さなコロにとっては、はじめてのことがいっぱいの
大冒険でした



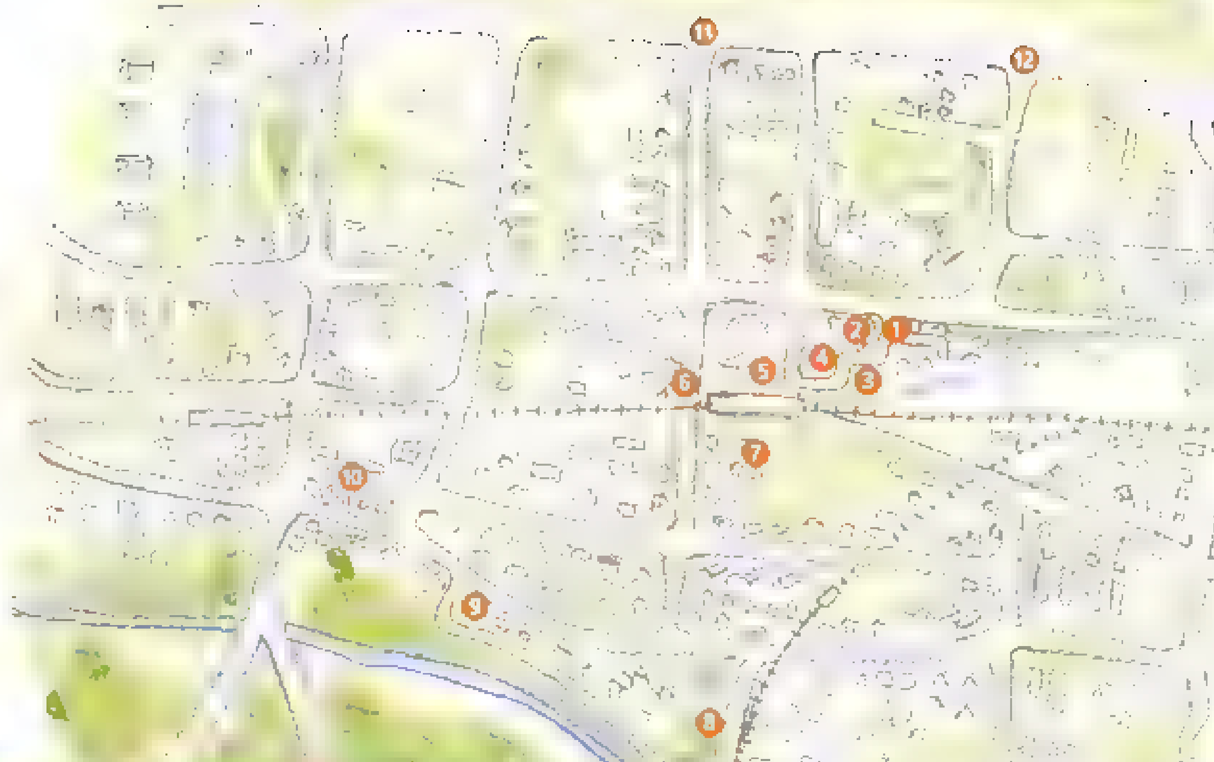
1 コロが住む家



2 コロの家のすぐ近所にある保育園
子供たちが毎日元気に遊んでいる



3 サワ子の通学路



地図作成協力 柿崎俊道
地図イラスト 高嶋正男



4 駅へ向かう一本道
線路と平行している



5 コロの住む町の駅前ロータリー
人と車で賑わっている



6 学生のお姉さんに連れられてくる踏み切り
コロは，自転車のカゴから飛び降りてしまう





7 駅向こうの飲み屋街　昼間ということもあって閑散としている　ダンボールの上で昼寝中だったノラ猫に会う



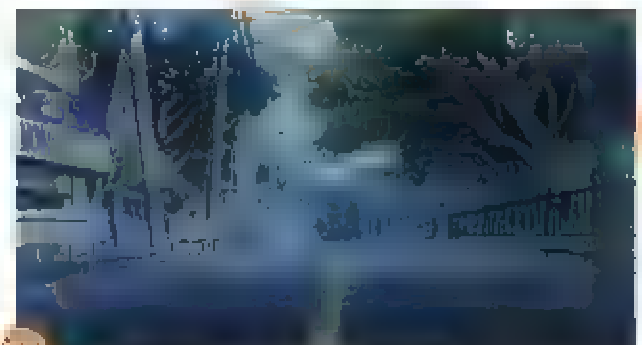
8 公園近くの高架下　コロにとっては初めてくる場所



やさしい老犬がいる家のあたり
ここでコロはやっとご飯が食べられる

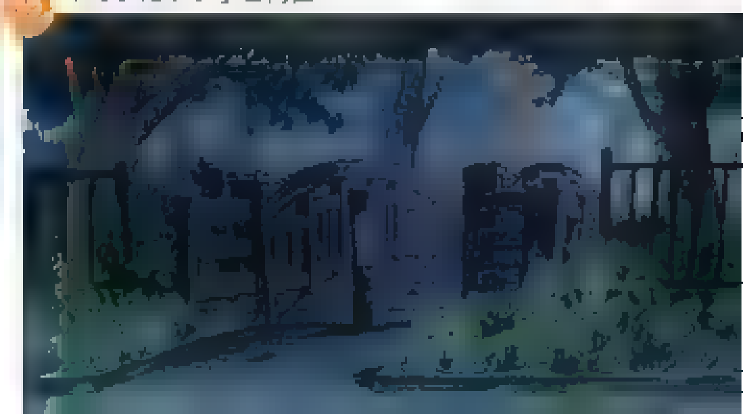


10 歩き疲れたコロが一夜を過ごした駐車場



11 駐車場でおじさんに拾われ幸運にも家の方へともどっていく

車の窓から，飛び出すコロ　一目散に走り出し，その先の道でコロを探しに来ていたサワ子と再会



僕らが見た感じに近い風景を意識して

「コロの大さんぽ」では美術スタッフが手がける背景画を新しい手法で描いているという。それは一体どんなもので、どんな画材を使っているのか、美術監督をつとめた吉田昇さんに聞いてみた。



見る人に解放感を与える画風

――この作品の背景画は、これまでのジブリ作品と違い、新しい手法で描かれたということですが。

吉田　そうです。「はじめてのおつかい」という絵本がありまして、その絵を描かれた林明子さんの画風を取り入れようというところからスタートしました。それは色鉛筆を主に使った描き方でした。普通、アニメーションの背景はポスターカラーで描いているんです。だから色鉛筆という画材を使うのははじめてだったので、最初は塗り方からスタッフと一緒に練習したりしました。実際にはポスターカラーを下地に塗って、その上に色鉛筆で色を塗って、さらに水彩絵の具なども使ったりしていました。

――家並みなどを描いた背景画の線が微妙に歪んでいて、それが見ていてとても心地よかったのですが、それも林さんの画風からきているものなのでしょうか。

吉田　そうです。僕たちが今回参考にした林さんの描いた絵本を見るとわかると思うんですけど、風景が全て上に広がっている感じで描かれているんですよ。それが絵を見る人に解放感を与えてくれて、見ていてとても気持ちがいいんです。宮崎さんがこれを参考にと言われたところもそんなところにあったように思います。ただその角度が非常に微妙で、やりすぎると絵そのものが壊れてしまいますから、その辺はかなり苦労しました。

でもその時に改めて自分が普段歩いている町をじっくり観察してみて、実際には電柱なんかは真っ直ぐ立っていないように見えることに気がついたんです。自分が目に馴染んだ風景は、雑然としていて、本当はきちんと垂直に立っているのかもしれないけれども、全体に曖昧で、整って見えない。そういう感じが出せたらいいなって思っていました。だから僕らが見た感じに近い風景を意識して描いたつもりです。

色鉛筆の新しい発見に出会って

――これまで使ったことのない色鉛筆を使った印象は?

吉田　発色がなかなか掴めなくて大変でした。

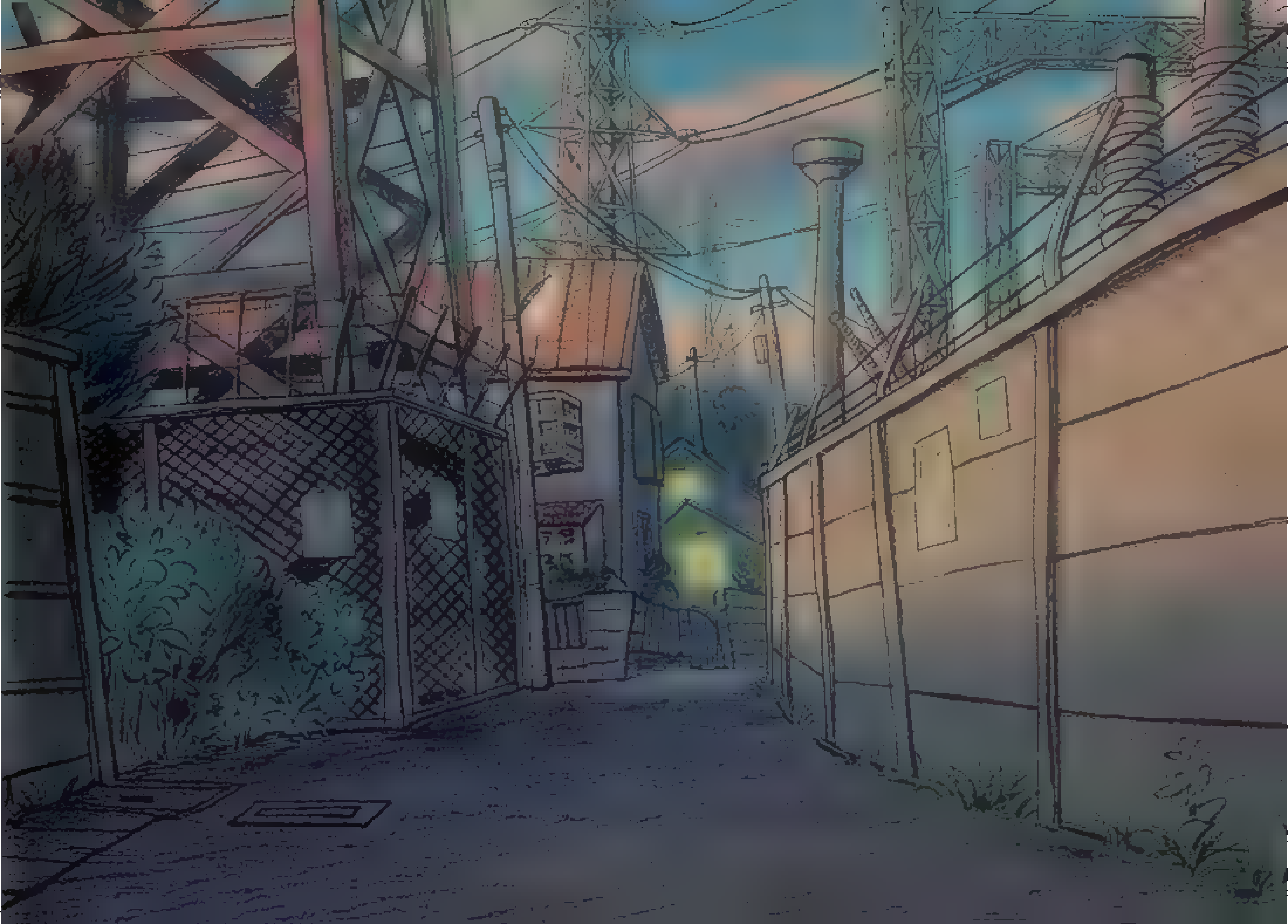
――色鉛筆というと、一本でいろんな色が出るという印象があります。

吉田　そうなんですよ。角度をちょっと変えただけで同じ鉛筆なのに全然違う色になってしまうこともあるし、塗れば塗るだけテカッてきたりする。ただ、面白かったのはポスターカラーなどと違い、いろんな色をどんどん重ねて塗ることによって、新しい色が生まれてくるんです。それが背景画そのものを面白いものに変えてくれる。使っていく中で新しい発見にたくさん出会いました。

――新しい発見というのは具体的にはどのようなものですか?

吉田　例えば茶色を塗った上に緑を塗った時に、先に塗った茶色がものすごく生きてくるんです。それが今までにない感じなんです。だからいろんなメーカーのものを使ったりして、試していきながら塗っていると、自分でも思わぬ絵が出来てくる。これはとても楽しかったです。

宮崎さんはきっとそういう色鉛筆の持つ面白さを知っていて、こういうやり方で背景を描くことを提案したんじゃないかと思います。ただ、もしかしたら宮崎さんが求めていたものは、あっさりと、ポイントポイントで色鉛筆の効果が出ていればいいという感じのものだったように思います。でもやってい







くうちに面白くなってしまって、楽しい世界に描ければいいなっていう思いが強くなってしまって（笑）

——そういう意味では今回の背景画はいわゆる写実的なものではなかったですね

吉田　そうですね。でももともとアニメーションの背景は写実的に捕らえて描いていますから、そのノウハウを生かしながらということではありました　だから林さんの絵よりもやはりアニメーションの背景に寄ったものに仕上がっていると思っています

——完成した映画をご覧になった印象は？

吉田　けっこう鮮やかだなって思いました。ちょっと派手になりすぎたかなっていう気もしました。ただ最初の頃はまだ色鉛筆という画材に対して恐る恐る接していましたから、冒頭のシーンなんかは全体に色が薄いんです。それがだんだん色の立たせ方を覚えていったことでラストの方のシーンではかなり色を綺麗に出すことを考えている感じに仕上がっていました

ノスタルジックにしたかった夕方から明け方のシーン

——今回、特に気に入られている背景は？

吉田　強いて上げるなら夕方から明け方までの時間の移り変わりを描いたところですね　参考にした「はじめてのおつかい」という絵本は昼間の話なので、その辺は絵本からはなれて楽しんで描きました

——夕方のシーンはとても微妙な時間帯で、難しかったように思いますが

吉田　ちょうどこの作品の背景を描いている時に同じような夕焼けの日があったんです。宮崎さんがまずそのことに気づいて、僕を散歩に誘ってくれたんです。それで「この感じでいきましょう」ってアドバイスをもらいました。それは空と地上がそれぞれに曖昧な色に染まりながら輪郭も曖昧に見える不思議な感じでした

——深夜というのも難しかったのではないですか？

吉田　いや、難しいというより、面白かったです　特にコロが野川公園辺りの高架下近くを歩いてくるあたりからは、風景全体がちょっと古い町並みになっていくんですよ。コロがご飯を食べさせてもらう家なんかも最近の新しい家ではないですしね　なんかコロがただ迷子になったわけじゃなくて、時間まで遡ってしまったような感じがして描いていて楽しかったんです。この夕方から明け方までのところは、描いているうちに全体にノスタルジックなものにしたくなってしまいました。だから暗いけど、何か温かみのある感じが出せればいいなあって思っていました。そして、この作品を見た人に僕らが楽しんで描いた感じが伝われば嬉しいです

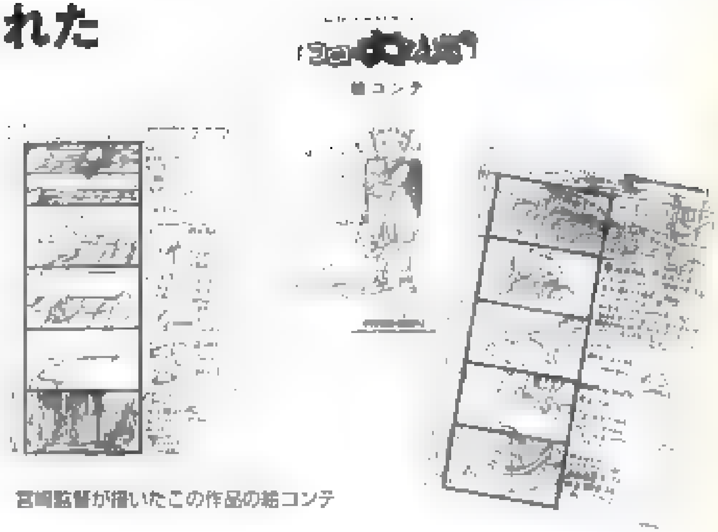
吉田 昇　よしだ・のぼる

多摩美術大学卒業後デザインオフィスメカマンに入社　アニメーションの背景の仕事をはじめる　その後フリーになり「もののけ姫」にスタッフとして参加　以後ジブリの社員になり「コロの大さんぽ」ではじめて美術監督をつとめる

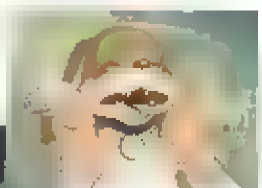


「コロの大さんぽ」はこうして作られた

「コロの大さんぽ」は、映画になる前に一度別な形で作られている。それは宮崎駿監督が美術館を作ろうと思い立つよりも前に遡る。時は1997年に「もののけ姫」が完成した頃のこと。アニメーション制作でもコンピューター化が進み、ジブリも今後はセルを使わない方法でいくことが決まりつつあった。そんな時、宮崎監督がセル画を使った物語を作ろうと言い出した。アニメーションにするのではなく、静止画のセル画で見るひとつの物語を作り残しておこうというのだ。舞台はジブリと馴染みの深い小金井市。ちょうどその頃、宮崎監督が小金井市の歴史に興味を持っていたからだ。そうして出来た物語が仔犬のコロが迷子になり、小金井市の町を彷徨うというものだった。それを「もののけ姫」や「千と千尋の神隠し」などで作画監督をつとめた安藤雅司さんが絵コンテの形にし、セル画に一つ一つのシーンを起こしていく作業が行われた。その翌年、美術館を作ることを決めた宮崎監督は、そこで上映する短編作品を作るにあたり、「コロの大さんぽ」をアニメにしたらどうかと提案。そうして作られたのがこの作品だ。セル画で描かれたものは、美術館2階のギャラリーに一部飾られている。この映画と見比べてみるのも面白いかもしれない。



宮崎監督が描いたこの作品の絵コンテ





この作品の主人公は仔犬のコロだ。よって主人公であるコロの鳴き声も当然犬の声でなければならない。そこで今回コロ役に抜擢されたのは、ジブリ撮影部に所属する古城環さんの実家にいる仔犬達。古城家にいるゆきという犬が、ちょうどこの作品の制作中に9匹の仔犬を出産していたのだ。そのうち4匹とお守り役のコリー犬がジブリに集まった。かわいい仔犬が来たとジブリスタッフの熱烈な歓迎を受けた後、試写室に机や椅子で急ごしらえに作られた大きな柵の中へと移動。仔犬達はすぐに無邪気に遊びはじめたが、おとなしい性格なのか、どの犬もなかなか鳴いてくれない。終いにはエサやおしっこの始末に翻弄されるスタッフを尻目に、すやすやと眠りだしてしまった。結局、何とか鳴き声は録れたものの、少し足りない部分もあり、[illegible]スタッフの協力で他の犬の声も足してもらい、ようやくコロの声が完成した。



コロの声の秘密

月1日

宮崎駿監督から、美術館で上映するための短編映画についての制作に対する心構えについて話がある。今日からいよいよ本格的に制作スタートという感じだ。この「コロの大さんぽ」の他、2作品の短編映画も同時進行で作っていくため、宮崎監督の話の後、作品ごとに作業がしやすいように大がかりな[illegible]替えが行われた。今まで1本の作品を全員で作ってきたジブリにとって、3作同時進行は初めてのことだ。

9月

宮崎監督がさっそく絵コンテ作業に入る。ちなみにこの時すでに「千と千尋の神隠し」の準備も始まっていた。

9月14日

この物語の主人公である仔犬のコロを描くためには、仔犬の動きを知らなければならない。そんな時、「もののけ姫」などの美術を手がけた山本二三さんのお宅に仔犬が2匹いるという情報をキャッチ。スタッフ数名が代表して、山本さんのご自宅へお邪魔し、仔犬（テンとケン）の動きを観察。ビデオカメラを片手に、犬達と思いっきり遊んでくる。

9月16日

絵コンテ完成。「早いだろう」と笑顔の監督をよそに、始終動きまわるコロのカットの多さに、スタッフ一同青くなる。

作画打ち合わせが行われ、スタッフはい

「コロの大さんぽ」制作日誌

よいよ具体的な作業に突入。この時点で、今回の背景に、絵本の「はじめてのおつかい」などの絵を描かれている林明子さんの画風を取り入れることが話し合われる。林さんの画風とは、これまでのジブリ作品にはない、絵の具と色鉛筆を使用したやわらかな色合いに、独特の構図の画風。初めての試みに、美術スタッフの悪戦苦闘が続く。

11月9日(水)

作画作業が順調に進められる中、第1回声の出演者の社内オーディションが行われた。場所は第2スタジオに完成してまだ間もない試写室。この作品は制作途中で絵の動きなどをチェックする作業をはじめ、声の録音も、全てこの試写室で行われる。社内から声優デビューを果たす人物は誰だ!?

11月12日(金)

この日は第2回社内オーディションの日。一体誰が選ばれるのか、新たな才能を発揮する人は誰なのか。冗談半分で始まった企画がどんどん本格的になってきてしまった。

11月13日(土)

制作スケジュールの延期が決定。気を引き締めなおす。

11月15日(月)

宮崎監督が社内オーディションのテープを聞き、候補者を選出。選ばれたのは、サワ子のお父さん役に、この"ジブリの森のえいが"第1作目「くじらとり」のプロデューサーで、スタジオジブリで制作進行の仕事をする居村健治さん。お母さん役に徳間インターナショナルの森吉治予さん。自転車に乗った画学生のお姉さん役にムゼオ・ダルテ・ジブリの長嶋明子さん。コロを拾い、車に乗せる工務店のおじさん役に同じくムゼオ・ダルテ・ジブリの盛田茂さんの4人。さっそくそれぞれ練習を開始してもらう。

2000年2月19日(土)

いよいよ声の録音がはじまった。といってもこの日は主役のコロの声録り。録音場所はもちろん社内試写室。計5匹の犬がスタンバイするが肝心の仔犬たちは眠ってばかりでなかなか声を出さない。かなりの時間、仔犬たちが鳴くのを待つことに。ようやく目が覚めて「クーン、クーン」と鳴きだしたところをうまく収録。結局、半日がかりでの作業となった。

5月10日(水)

音楽が完成し、社内の試写室で試聴が行われた。今回の音楽を担当するのは、「くじらとり」の音楽も担当した野見祐二さん。宮崎監督も加わり、映像に音楽を合わせて聞いてみる。

5月20日(土)

映画のオープニングにつくアニメーションが完成。"ジブリの森のえいが"の顔ともいえるこのアニメーションには、久石譲さんが音楽をつけてくれた。

6月9・10(金・土)

いよいよ声の出演者の収録。社内オーディションで選ばれた4人と、プロの俳優さんが集まって、キャラクターに命を吹き込んでいく。サワ子の声を演じた駒沢いつきちゃんは、子役ながら、しっかりとした演技を見せてくれ、周囲を驚かせる。素人4人も、何度もリテイクを繰り返しつつ大奮闘。緊張をほぐすためにお酒の力も借りて何とか終了した。こうして短編映画「コロの大さんぽ」は完成への道をたどっていった。





















「コロの大さんぽ」制作中のスナップ写真数々



スタジオジブリ／ムゼオ・ダルテ・ジブリ　提携作品

［声の出演］

コロ	ゆきの仔犬道
サワ子	駒沢いつき
お父さん	居村健治
お母さん	森吉治予
自転車のお姉さん	北嶋明子
工務店のおじさん	盛田 茂
少女	小川紗弥香
少女の母親	めぐろあや
近所のおばさん	土田ユミ
しげる	石原圭人
チコ	菅野奈々

［スタッフ］

製作	徳間康快
原作・脚本・監督	宮崎 駿
音楽	野見祐二
動画参照	林 明子
演出アニメーター	芳尾英明
原画	山森英司　松瀬 勝　小野田和由　米林宏昌 森田宏幸　武内宣之　富田悦子　中嶋忠二
動画チェック	中込利恵
動画	手島晶子　矢澤真由　鶴岡耕次郎　伊藤 望 大西 綾　大橋 実　海内 努　佐藤雅子 横田匡史 北島由美子　土岐弥生　槇田喜代子 山浦由加里　谷平久美子　矢野守彦　中里 舞 安達晶彦　佐伯 忍
作画協力	アニメトロトロ　スタジオコクピット
美術	吉田 昇
背景	春日井直美　福留嘉一　長田昌子　糸川敬子 佐々木洋明　石原智恵　矢野きくよ　増山 修
色彩設計	保田道世
撮影監督	奥井 敦
色指定	守屋加奈子
検査	山田和子　野村寿絵
スキャン	石井裕章　杉野 亮
デジタルペイント	森奈緒美　井関真代　熱田尚美　大山亜博 鶴岡由美子　岡田理恵
CGチーフ	泉津井陽一
CG	佐藤美樹
デジタル撮影	薮田順二
編集	内田 恵

録音演出……林 和弘
整音……井上秀司
効果……伊藤道廣
効果助手……中沢真理子
効果制作……サウンドリング
整音助手……堀田英二
録音スタジオ……東京テレビセンター
音楽ミキサー……大野映彦
音楽編集……大野直子
指揮……マリオ・クレメンス
演奏……チェコ・フィルハーモニー
室内管弦楽団
オーケストラ・
コーディネート……伊藤みゆき
（オクタヴィア・レコード）
レコーディングスタジオ……芸術家の家 ドヴォルザーク・ホール
ワンダーステーション
音楽制作……柴田秀一 柏村めぐみ（パワー・ボックス）
稲城和実（スタジオジブリ）
タイトル……浅野宏一
制作進行……高橋敦史
制作デスク……神村 篤 望月雄一郎
取材協力……山本二三（テンとケン）
映像・製作協力……IMAGICA
タイミング 平林弘明
デジタル・フィルムI/O
柴田祐男
ラボ・コーディネート
川又武久
制作……スタジオジブリ
プロデューサー……山本珠実
制作プロデューサー補……高橋 望 渡辺宏行
制作プロデューサー……鈴木敏夫





•本編に使われたエンディングテロップ。名前横のイラストは宮崎監督によるもの。



発行日——2002年2月28日初版　2009年8月31日第7刷
発行人——中島清文
発行所——財団法人徳間記念アニメーション文化財団
東京都三鷹市下連雀1-1-83　三鷹の森ジブリ美術館
編集協力——株式会社スタジオジブリ
編集——今西千鶴子
デザイン——大野リサ
印刷・製本——図書印刷株式会社
定価400円（税込）

TMCFA-004 400
4 571101 904604